

### 《栃木の書壇五十人》展鑑賞の手引き



令和三年一月十日(日) 九時〜十二時

宇都宮東市民活動センター 創作室

## 篆書・篆刻とは

三千数百年前、すでに漢字は、人間（為政者である王）が神と占ト（吉凶を占うこと）を通して交信する神聖なものとして存在していました。そのためなのか、漢字は、交信のツールとして両者が互いに理解しやすい具象的な形態という特徴を持っています。実際に神との交信とその記録保管に用いられたのは亀の甲羅や獣の骨でした。その表面には、墨書することもあります。むしろ神命と呪能の永続化を図るために、鋭利な刀で刻みつけ、その凹みに朱を塗り込んだりもしました。

まもなく青銅の鑄造技術が確立し、祭器として陶器から青銅器へ大きく転換すると、甲骨と違って粘土状の鑄型には字形が丸みを帯びた銘文を残しました。また、この頃は祭祀の対象が祖先神に変わりつつあり、古文ではなく、氏族標章としての図象や簡単な器名からはじまってやがて作器の由来や子孫への伝言といった長い銘文を刻むようになります。

西周晩期から春秋戦国期（東周）にかけては、周王朝を天子と仰ぐ諸侯国の興亡と覇権争いが続きました。諸子百家が出現したのもこの頃ですが、それに呼応するかのよう、各国の文字には装飾化や簡略化などによる独自性がみられるようになります。このことが結果的に、漢字の書体の多様化に拍車をかけていくことになりました。

しかし、それでも依然として、漢字はその原初の姿から秦時代の小篆に至るまで千年以上もの間、基本的な構造を変えずに、森羅万象を髣髴とさせるような「象形性」を綿々と保ち続けてきました。

一方、漢字が神の託宣を伝えていた殷時代より、西周を経て春秋・戦国時代に至ると、諸侯国のめまぐるしい興亡の中で、血族関係による封建制度から官僚制による君臣体制へと移行し、また、鉄器生産の拡大による穀物生産の向上や様々な産業の発達に伴い経済の流通が盛んになりました。このため権利や信用を表すための「古璽」と呼ばれる「印」が重要な役割を持つようになっていきました。

つまり、漢字がその神聖性を背景に、人間どうしの意思確認や伝達の手段にも使われるようになったのです。これに用いた文字は、戦国期の「金文」から変化させ、印に巧く収めることに配慮した精緻な書体でした。

さらに、秦に至り印式が整うようになると、趣は更なる変化を遂げます。これが「秦印」で、字画は縦画、横画とも直線的で分間が等しく、田字形の界線を施した陰文（白文）という特徴を持っています。そしてさらに漢代に入ると秦印の風を發展させ、威厳と格調に満ちた「漢印」が登場するのです。

「漢印」では主に「印篆」と呼ばれる、字枠に点画を万遍なく満たすような端正な書体が用いられるようになりますが、この「漢印」が篆刻学習を進めていく上での規範とされています。一般的に、甲骨文からこの印に用いた書体までを総称して「篆書」と呼んでいます。

〔古璽 春秋戦国期〕



異耳



口屯口



〔大吉昌内〕



〔右馬殿将〕



〔漢委奴国王〕

〔秦〕

〔漢〕



漢代以降、次第に漢印に備わっていた風韻は失われましたが、宋代になると、古璽・漢印への復古の気運が始められます。さらに元代に入って彫りやすい石材が発見されると、文人の間で刻印することが広がりはじめ、明の文彭（ぶんほう 二四九八～一五七三）は広くその研究と啓蒙に努めました。文彭は今日の篆刻の開祖とも言われます。

「篆刻」とは、「篆書を刻すこと」ですが、私たちが篆刻を学ぶときは、単に刻す行為のみを指すのではなく、そのモチーフとなる「篆書」について学んだり、「印」が成立した中国の戦国時代（前四七五～前二二一）からその隆盛を迎える漢時代にかけての「印の歴史」を学び、さらに、それらを端緒として、後に金石学が盛んになり名人が輩出する明清時代の名品（印および書）に至るまでの様々な風韻に触れ、その中に秘められた理法を学びとることを含んでいます。そう捉えることができれば、なぜ「篆書」にこだわるのかということも自ずから諒解されるはずなのです。

徽派「明 文彭」

琴罷倚松玩鶴

徽派「明 何震」

聽鶴深處

浙派「清 丁敬」

包氏某陀吟屋藏書記

鄧派「清 鄧石如」

有好多能累此生



実際、初めは自分の印を作ればそれよいと思っていた人が、やがて漢字の歴史に興味が移ったり、さまざまな美しい石材や古銅印、さらには名人と呼ばれる篆刻家たちの印譜や書画の名品の蒐集に凝ってしまったり、また、「篆書」という書体に魅力を感じ、刻することから篆書をモチーフに書作活動することと方向を転じることさえもあるのです。

自分の手による印ができあがったときの喜びは、それだけでひとしおなものがあります。もし、書道を習っていれば自分の作品に押す雅印となりますし、書道以外でも版画や水彩画の作品など、楽しみながら自由に使うことができます。また、蔵書印や封緘印として使うことも可能です。

しかし、それだけに止まらず、好奇心をもって学べば学ぶほど新たな発見が訪れる：「篆刻」とはそんな奥の深い芸術なのです。

ただ、初めて篆刻をやってみようと思う段階では、一度に多くの事を吸収することは困難だと思えます。まずはこの「篆刻」の世界に広がるさまざまな事象を広く眺め、徐々に興味・関心を膨らませるように臨むと良いでしょう。今回の講座では、初めて「篆刻」に挑戦しようとする人のための基本的な知識と技術を学ぶことが中心になります。

それでは、篆刻で扱う書体―篆書について、もう少し詳しく学んでみましょう。

## 篆書の種類

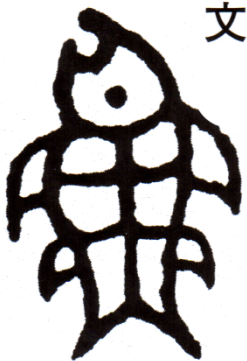
### 甲骨文



魚

甲骨文は、現存最古の漢字ですが、象形文字の他に、二つ以上の要素を組み合わせて一字を構成した会意や、形声など複雑な文字も見られることから、文字としてすでに発達したものと考えられています。

### 金文



殷とそれに続く周の王朝では、王室や国家の祭祀の儀式を行う際、供物に用いる器としてさまざまな青銅器が作られ、そこに文字が鑄込まれることがありました。それらの文字を金文といいます。

### 大篆



まとまった字数をもつ現存最古の石刻は、戦国時代の秦で作られた石鼓文です。その文字は大篆で刻されています。大篆は、後に秦の始皇帝が統一をはかった小篆に先んずる書体で、字形は金文より整齊です。

### 小篆



戦国時代を征し、天下を統一した秦の始皇帝は、度量衡や文字を統一し、法令を国の隅々に行き渡らせて、中央集権制を確立しました。この時始皇帝が自国在来の文字を基準に統一した文字を、小篆といいます。



## 篆書の歴史

皆さんは、漢字を使っている人が全世界でどれくらいいると思われますか。驚くことにその数は全世界の約四分の一近くになるだろうと言われています。その漢字の歴史は、現在わかっているだけでも、一九六五年に河北省石家荘市近郊で発見された、殷（商）時代中期（紀元前一五〇〇年頃）の陶器に刻まれた陶文にまで遡ります。これは、陶器を焼く前の粘土に細い棒や骨などで刻みつけた「刻画符号」と呼ばれる記号のようなもので、文字の萌芽を想起させるものです。その後、各地での発見に続いて、一八九九年、河南省安陽市の殷墟で、清の国子監祭酒（文部長官相当）であった王懿榮が竜骨と呼ばれていた骨に刻まれた殷時代の文字を発見しました。それは既に、文字創生よりかなりの時を経過したと思われる姿でした。

漢字は、当初、森羅万象を象形化することから文字としての生を受けました。例えば、「山」は「𡵓」、「木」は「𣎵」、「水」は「𣎵」、「雨」は「雨」という具合です。当時人間は大自然に対して極めて小さい存在であり、自然の力、神の力に畏敬の念を強く抱かざるを得ない時代でした。そして、その神の意志を確認するために、神聖な生け贄として使われた亀の甲や獣の骨にこれらの文字を占文としてまたはその結果を記録するための文字として刻み付けられたのです。これが、甲骨文です。

① 甲骨文 : 亀の甲や獣の骨に占いの内容を刻んだもの。硬い

骨を鋭利な刀で刻すので細く直線的。字は五〜十mm程で極めて小さい。



己亥、ト王貞亡田在四月  
己亥の日、占いて王貞（とふ）  
田（とが）亡きか。四月に在り。

さらに、青銅器の鑄造技術を獲得した後は、自分たちの氏族標章、製造主名、製造にいたる経緯、子孫へのメッセージなどをその器面に残しました。この銘文を金文といいます。

② 金文 : 青銅の祭器に鑄込んだ文字。粘土状の鑄型に刻むので甲骨文と比べ曲線や肥瘦が加わり、繁画も大らかな結構で表現が多彩で躍動感がある。

初期の金文は殷時代にみられます。甲骨文からは遅れはしたものの、前一一世紀末に周の武王によって紂王が滅ばされるまでの間に、それほどの期を問わずに発展し、使い分けをした時期もありました。大らかで躍動感があるのが特徴です。

## 婦好墓三連甗













封建制下、王からの恩賜として授けられる金（銅のこと）をもとに、名譽と權威の象徴の性格を持つ青銅祭器は製造され、その榮譽を永く子孫に伝え、繁榮を祈るために金文は鑄込まれます。この文字形態は、次の周が独自の文字を持たなかったためにそのまま受け継がれ、さらに、高度な鑄造技術を持った殷の工人たちを厚く保護しました。このようにして、彼ら専門の工人の手によって美的にも実用的にも幾度となく淘汰が繰り返され、次第に完成度が高まっていきました。

楚王今圖于鼎



やがて、「秦」は、始皇帝によって全国の統一を成し遂げると、自国で使用していた文字を規範にして全国の文字を統一させました。それまで「秦」で使われていたのが、『籀文（ちゅうぶん）』と呼ばれる書体で、その代表例として「石鼓文」がよく知られています。

自国の文字を活かして他国の書体を廃することは、皇帝の意志を徹底させたり、諸国間の情報伝達上の障害を抑えるだけでなく、他国の文化を廃するという統治政策とも合致していたのでしょう。こうしてできたのが、「小篆」です。

石鼓文  
(戦国中期—後期)



石鼓文(北京·故宫博物院)

戦国時代の刻石の文字として珍しい  
戦国時代・西万の墓のもの。墓  
書の祖といふべき字体。時代に  
出土して以来、有名なものだが、  
年代については諸説ある。

③ 小篆…始皇帝が丞相李斯に命じて制定させた書体。縦長で左右対称を基調とする。改良のも  
とである籀文は小篆に対して大篆と呼ぶ。



泰山刻石(BC二一九)

本書の完成された形  
が、所蔵者が全国を行脚したときに見出された刻石の一つ。  
七刻石のうち、いま「泰山刻石」と「琅琊刻石」とが  
残っている。



このようにして、漢字はその体に精霊を宿し人間と神の意志を結ぶ神聖なる象形文字として生を受け、その性格を維持しつつも幾度かの変遷を経て、『小篆』という始皇帝の威厳を誇示するかのような装飾性の強い形態に収まりました。これは、金文に比べて象形性はかなり失われ、やや無機的な姿に変わりましたが、漢字の変遷を学ぼううえではとても重要な書体となっています。

## 篆書と篆刻との関係

さて、『小篆』は、威風壮麗である反面、実用性には欠けたため春秋戦国期には既に通用していた早期の「隸書」や「行・草書」、「楷書」が台頭し、通用体になることはありませんでした。しかし、「印」の世界では、現在に至ってもなお、簡便なものを除いては、厳然として篆書が尊重されているのです。「隸刻」や「楷刻」でなく、「篆刻」でなければならないということは、そもそも篆書は神との契約に用いられた当時の姿を留めていること、方寸の美的表現に対応させる工夫を重ねてきたという歴史を持っているからで、古璽の字体や漢印の印篆などもその過程で生まれたもののなのです。

さて、この篆書の優れた造形性は、墨による書表現の世界にも新展開を見せています。近年の各書展には、金文や小篆をモチーフに、自由で大胆な作品が数多く見られるようになりました。三千年もの前の古代人の感性が産み出した造形は、現代にも立派に息づき、かつ書作家のロマンをかき立てる魅力を放ち続けているのです。

同様のことは、篆刻の作品にも当てはまります。しかし、篆刻では、字形の面白さだけで字形を組み合わせたことを厳に戒めています。例えば小篆と金文を組み合わせるということは許されませんし、金文に限っても同時期のものに合わせなければなりません。（ひとくちに金文と言っても数多くの種類を総じて言っているのです。）また、組み合わせ上、むやみに筆画を増減・変形させることも誤字となる危険が伴います。篆刻では、方寸という限られた空間に、文字構造上の字源に基づく制約の範囲内においてのみ、篆書が持つ豊かな造形性が駆使できるのです。このことは、一朝一夕には習得できないなかなか厄介な壁ですが、学習の先の目標として是非、心に留めておきたいことです。

【篆書】王聖右銘 部分



吳讓之



【觀海者難為水】

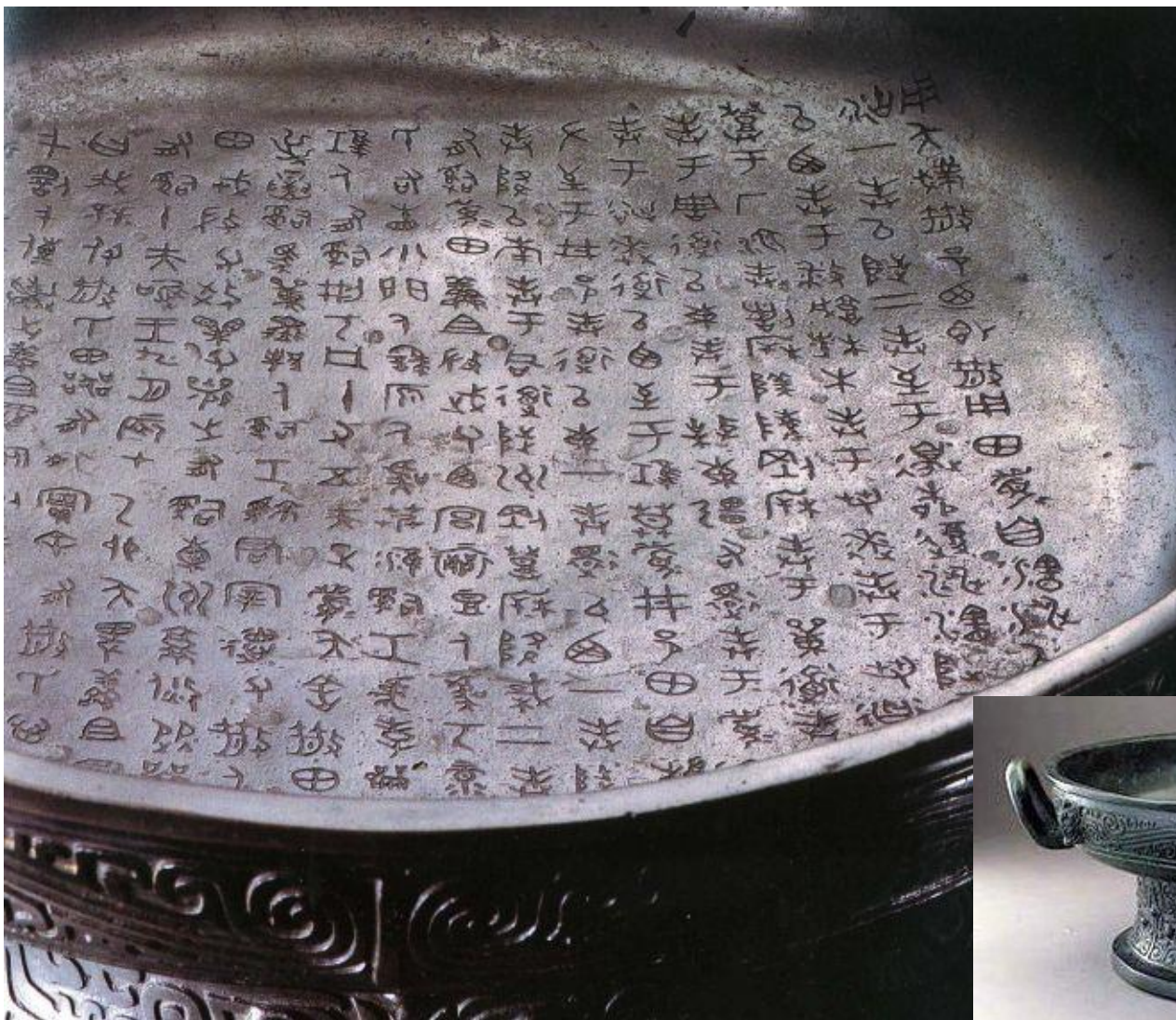


【篆書】王聖右銘 部分

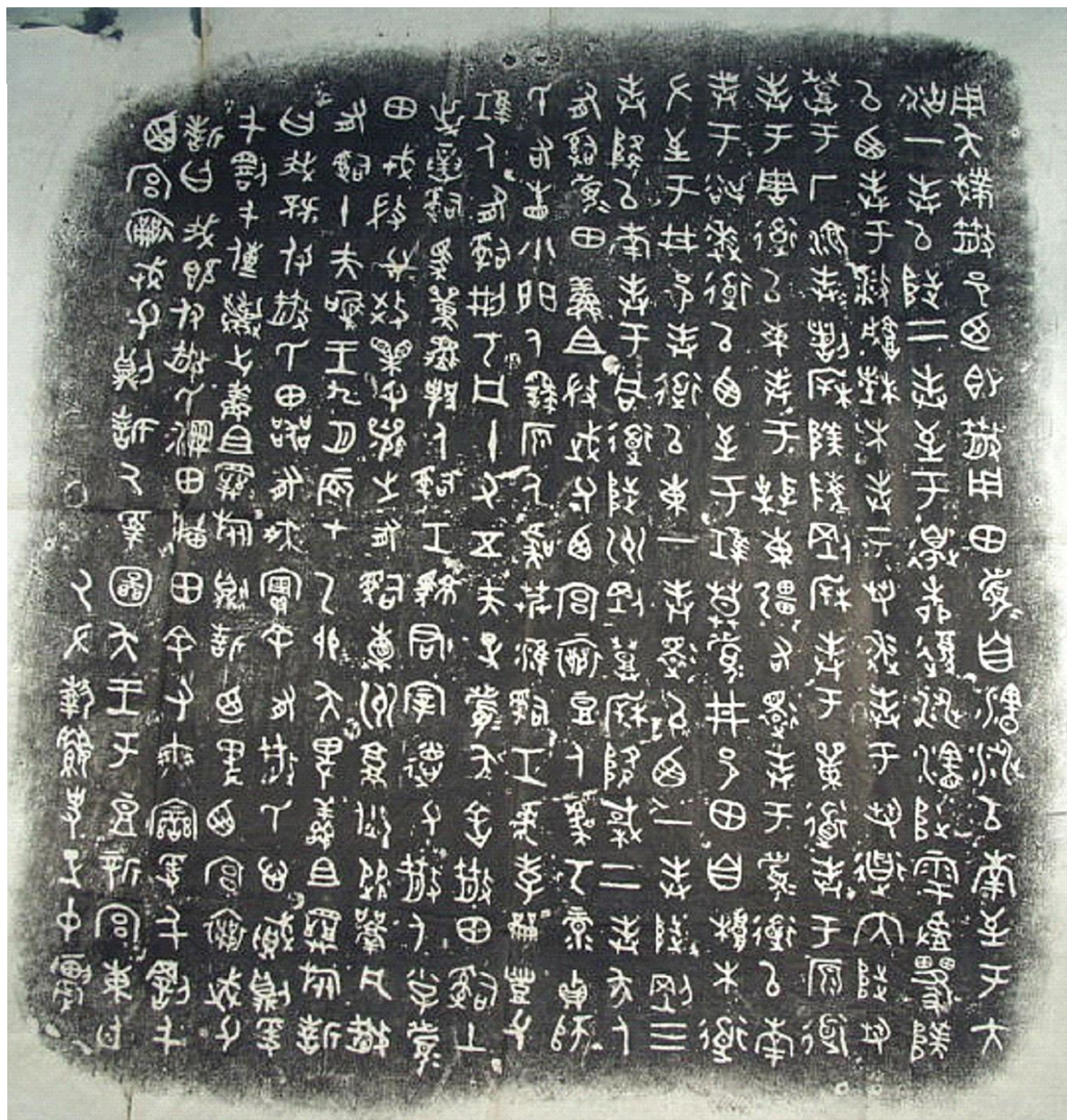


## 散盤（散氏盤・矢盤）

中国、西周後期の一九行三五〇字の銘文を有する盛水用銅器。口径50.5cm、高さ20.5cmで、虬龍文や饕餮文が施され、銘文には矢の国と散の国の境界に関する契約が記されている。前半には土地の調査実況、後半にはその調査に参与した人名と矢国の人の誓いの言葉が、力強い線で書かれている。







用矢燬散邑、迺即散用田眉（塙）。自瀋涉、曰（以）南、至于大沽、一封。曰（以）陟、二封。至于邊柳、復涉瀋、陟爭、戲嬰陟、曰（以）西、封于敵城挫木、封于芻迷、封于芻道、內陟芻、登于广渚、封荊析、陟陵、剛析、封于單道、封于原道、封于周道、曰（以）東、封于口東疆、右還、封于眉道、曰（以）南、封于谷迷道、曰（以）西、至于唯莫。眉、井邑田、自根木道、左至于井邑封道、曰（以）東、一封、還、曰（以）西、一封、陟剛、三封、降、曰（以）南、封于同道、陟州剛、登析、降械、二封。矢人有銅、眉田鮮、且、散、武父、西宮襄、豆人虞巧、泉貞、師氏右眚、小門人饒、原人虞芳、淮、銅工虎孝、開豐父、唯人有銅荊、巧、凡十又五夫、正眉矢舍散田。銅土苴寅、銅馬單魚、銅人銅工駮君、宰德父、散人小子眉田戎、散父、效巢父、襄之有銅橐、州賁、從從鬻、凡散有銅十夫。唯王九月、辰才乙卯、矢、卑鮮、且、驪旅誓曰、我既付散氏田器、有爽實、余有散氏心賊、剿（則）爰千罰千、傳棄之、鮮、且、驪旅、剿（則）誓。迺卑西宮襄、武父誓曰、我既付散氏瀋田牆田、余又爽變、爰千罰千、西宮襄、武父、剿（則）誓。厥為圖矢王于豆新宮東廷、厥左執纓、史正中農



辰	日	宇	不
廂	月	宙	地
觚	盈	滿	宮
張	麗	荒	黃

變	騎	紘	氏
嗣	修	員	宇
三	豈	外	文
韻	周	夢	

千字文。收員外散騎侍郎周興嗣次韻。  
天地玄黃。宇宙洪荒。日月盈昃。辰宿列張。



明德

# 明德」を篆書で書く

明  
ミヨウ  
メイ  
あきら  
か

徳  
トク

𠂔  
説文

𠂔  
説文古文

𠂔  
甲骨

𠂔  
甲骨

𠂔  
甲骨

𠂔  
金文

𠂔  
金文

𠂔  
金文

𠂔  
金文

𠂔  
金文 210

𠂔  
金文 189

𠂔  
金文

𠂔  
金文 36

𠂔  
金文 36

𠂔  
金文 54

𠂔  
金文 20

𠂔  
金文 43

𠂔  
金文 51

𠂔  
中山王器

𠂔  
三体石経

𠂔  
侯馬盟書

𠂔  
侯馬盟書

𠂔  
楚帛書

𠂔  
信陽楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
上楚

𠂔  
上楚

𠂔  
上楚

𠂔  
上楚

𠂔  
上楚

𠂔  
上楚

𠂔  
上楚

𠂔  
海簡

𠂔  
海簡

𠂔  
泰山

𠂔  
權量銘

𠂔  
權量銘

𠂔  
權量銘

𠂔  
權量銘

𠂔  
權量銘

𠂔  
權量銘

𠂔  
權量銘

𠂔  
漢鏡

𠂔  
漢鏡

𠂔  
徐三庚

𠂔  
趙之謙

𠂔  
趙之謙

𠂔  
胡樹

𠂔  
楊沂孫

𠂔  
吳熙載

𠂔  
古鈐

𠂔  
古鈐

𠂔  
秦漢印

𠂔  
秦漢印

𠂔  
秦漢印

𠂔  
秦漢印

𠂔  
秦漢印

𠂔  
封泥

𠂔  
錢松

𠂔  
吳昌碩

𠂔  
説文

𠂔  
甲骨

𠂔  
甲骨

𠂔  
甲骨

𠂔  
甲骨

𠂔  
甲骨

𠂔  
甲骨

𠂔  
金文 100

𠂔  
金文 129

𠂔  
金文 180

𠂔  
金文 182

𠂔  
金文 108

𠂔  
金文 108

𠂔  
金文 31

𠂔  
金文 210

𠂔  
金文 210

𠂔  
金文 210

𠂔  
侯馬盟書

𠂔  
楚帛書

𠂔  
王子午鼎

𠂔  
金文 39

𠂔  
金文 39

𠂔  
金文 59

𠂔  
中山王器

𠂔  
三体石経

𠂔  
侯馬盟書

𠂔  
楚帛書

𠂔  
楚帛書

𠂔  
包楚

𠂔  
包楚

𠂔  
包楚

𠂔  
山簡

𠂔  
山簡

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
郭楚

𠂔  
海簡

𠂔  
海簡

𠂔  
海簡

𠂔  
海簡

𠂔  
海簡

𠂔  
海簡

𠂔  
海簡

𠂔  
海簡

𠂔  
海簡

𠂔  
漢金文

𠂔  
漢金文

𠂔  
三体石経

𠂔  
徐三庚

𠂔  
趙之謙

𠂔  
趙之謙

𠂔  
趙之謙

𠂔  
古鈐

𠂔  
秦漢印

𠂔  
秦漢印

𠂔  
秦漢印

𠂔  
秦漢印

𠂔  
秦漢印

𠂔  
秦漢印

𠂔  
秦漢印

𠂔  
封泥

𠂔  
丁敬身

𠂔  
趙之謙

𠂔  
趙之謙



篆書に関する字書の例

